ルックウッドの画工白山谷喜太郎
——たどりつけない実像

森　仁史

年来追いかけている人物がある。本来ならばその正体を突き止めて総てを書いておきたいのだが、残念ながらどうしてもつきとめることができていない。やむなく、手に入れることのできたところをせめて書き連ねてみようと思う。

一八八〇年夏、アメリカ合衆国は中西部の都市オハイオ州シンシナティにマリア・ニコルズ（Maria Longwarth Nichols, 1849-1932）によってルックウッド（Rookwood）製陶所が設立された。彼女は地元の資産家ロングワース家の出身だったが、一八六八年退役大佐のG・W・ニコルズと結婚していた。彼女は音楽と美術に関心が深く、一八七三年から音楽フェスティヴァルを支援し、七八年には音楽大学設立を支え、ニコルズ大佐は初代学長に就任した。また美術については、ただ見たり調べて楽しむだけでなく、実際に作ってみたいという欲求の強い女性だった。一八七三年から中国画を習い始め、七五年には友人がロンドンで手に入れた『北斎漫画』を譲り受けていた。さらにこの翌年フィラデルフィアで開かれていた万国博覧会を見学し、日本の出品、とくに陶磁器と金工作品に強く惹かれ、陶磁器絵付けに取り組もうとした。一八七八年に夫が『陶磁器　その製造法』を刊行したとき、彼女は表紙や挿絵を担当し、北斎などから引用して描いた。〔図1〕この図書はアメリカでは日本の陶磁器の優秀さを指摘した最初の書物とされている。

1　Nichols,G.T., "Pottery . How It Is Made Its Shape and Decoration."G.P.Putnam's Sons, NY., 1878.

ここまでは同時代の欧米のジャポニザンによくある話だろう。しかし、彼女はフィラデルフィア万博からシンシナティに帰って、父親に日本人職工を雇って製陶所をつくりたいと提案したのである。このとき父親はこれには取り合わなかったが、四年後には製陶所実現にこぎつけたのであった。しかし、この時点では日本人職工を雇ってはいなかった。これはマリアの個人的意欲だけではなく、アメリカのジャポニスムには近年瀧井直子によって解明された藤雅三や明治期の滞米作家（小川三知、河辺正夫ら）がジャポニザンやアメリカ商人と直接関わることがヨーロッパと異なるように思える。それは太平洋を渡ればたどり着ける遠くはあるが隣国であるという地理的関係と日本にとって常に最大の貿易相手国であるという経済交渉の幅広さに由来するのだろう。

あまり知られていないかもしれないが、シンシナティは十九世紀後半のアメリカの中でもかなりの日本マニアが出現した都市であった。一八七八年には四三三点、一八八〇年には三〇九点の日本美術品の売り立てが行われていたし、七八年には女性美術館協会によって借用品によって構成された日本美術品展が開催され、焼物（薩摩、加賀、横浜、京都、肥前焼）、青銅、漆、木彫、刀剣、七宝、楽器などが陳列された。この展示は工芸品が大半で、軸装絵画や木版画が含まれていなかったことが特徴的である。ここにニコルズ所蔵品一六点も出品された。一八七六年にサン・フランシスコに日本美術商を開業したG・T・マーシュは一八八一年シンシナティに支店を設けている。八六年にはこうした動きは郊外のエデン・パークに美術館〔図2〕を建設するにいたった。少し後になるが、一八九六年W・H・ケッチャムは七三五点の絵画、彩色木版画をこのシンシナティ美術館に寄贈し、コレクション展が開催された。この会期中にE・フェノロサが同館で講演している。同美術館はその後規模を拡大したが、当時と同じ場所で現在も

活動している。

サンフランシスコの骨董商ディーキン兄弟商会（Deakin Brothers & Co.）は一八八四年横浜に支店を開設した。この翌年彼らは日本人村（Japanese Village）と名づけた職人の一団を組織し、全米各地（ミルウォーキー、シカゴ、オマハ、セントルイス、シンシナティ、ニューヨーク、ボストン）を巡回させた。倉田喜弘『一八八五年ロンドン日本人村』（朝日新聞社、一九九三年）によると、こうした目論見はこれが最初ではなく、日本に在住したことのあるオランダ人タンナケル・ブヒクロサン（Tannaker Buhicrosan）が同じ一八八五年一月十日からロンドンで八十五名からなる日本人村を開催し、五月までの百十二日間で二十五万人の観客を集めていた。

アメリカの事例について、『日米文化交渉史』移住編（洋々社、昭和三十年）は何によるのか明らかにせず、この渡航を一八八四年とし、一行を監督大沢延次郎（茨城県人）、医師武山祐嗣、七宝職人秋田三七、彫刻家勝田蘭刻、画工島田某、同青木瓢斎、縫箱師相沢勇太郎、裁縫師三谷平三郎、同伊藤某、同津田某、提灯職人加藤某、茶酌女大沢なみ他三名とかなり仔細に記述している。しかし、アメリカ各地に残る日本人村の巡業の記録は一八七五年であり、問題の白山谷はこの一行に含まれていたはずなのである。

2　シンシナティ美術館（創建当初）

日本側の記録として最も信憑性の高いのは外務省史料館が所蔵する「海外旅券下付表」であろう。このなかに探していた白山谷の名を見出すことができた。以下に少し整理して同じ日に発給された全員の名を書き出しておく。末尾に＊を付したのは返納の記録があるもので、帰国の日付が判明する。

一八八五年七月二十日発給　デーキン雇

平民	畠中友治	三十四年＊
平民	畠中エツ	三十三年＊
平民	鈴木兼松	二十四年八月＊
平民	田中鋳作	二十二年
平民	不川武三朗	十八年
平民	信松ミヨ	二十四年二月＊
石川県士族	藤橋虎太郎	十九年
東京府平民	吉田高春	二十六年＊
平民	須藤定年	五十七年＊
	須藤ワカ	三十年五ヶ月＊
	須藤六三郎	六ヶ月＊
	須藤スミ	五年八ヶ月＊
	渡辺銀蔵	十七年四月
平民	石黒郷蔵	三十年
平民	武　新二郎	二十年
平民	大塚藤兵衛	四十二年＊
平民	拝郷益夫	二十七年
石川県士族	白山谷喜太郎	三十三年一月

同日発給　フレッチャー雇

平民	勝田アサ	三十六年
平民	勝田勝太郎	三十六年七月
平民	久保木源二郎	十八年十月＊
東京府平民	田中金五郎	二十五年五月＊
東京府士族	伏木英九朗	二十一年

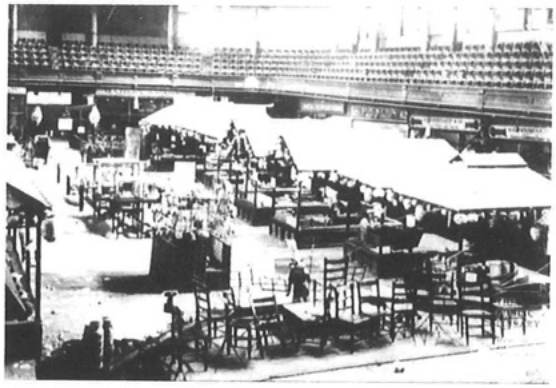
東京府平民　宮原岩二郎　三十一年六月＊
平民　天野常吉　三十四年六月＊
東京府平民　牧野豊三郎　二十四年九月＊
札幌県平民　高橋勝蔵　二十三年十一月＊
平民　武藤稲之助　二十五年
石川県士族　平岩才一郎　二十二年十月
神奈川県平民　大矢国三　三十一年十一月
和歌山県平民　大谷光六　三十三年七月
同日　米国ボストン港ジョーダマン社雇人
平民　山本惣助　二十九年六月＊

ディーキン雇が十九名、フレッチャー雇が十三名、その他が一名の三十三名で総てである。倉田によれば、H・フレッチャーも居留地にいたアメリカ人商人で、サンフランシスコやシカゴの自社で日本人職人を雇おうとしたのだった。しかし、翌年十二月十四日の『東京絵入新聞』には「米国人フレッチヤル外一人が」「又々来年八月迄に」「日本観せ物を興行せんと目下奔走中」とあるので、このときもジョーダマン社との関係は不明である。日本の経済不況のなか、海外に職を求めようとする日本人が多かったのは事実である。ディーキンに雇われた者のうち十名は一八八六（明治十九）年十一月十日に旅券を返納している。

このなかに白山谷のほかに藤橋虎太郎、平岩才一郎の二名の石川県士族が含まれ、彼等は明治三、四年頃金沢県が一斉に作成した「由緒一類」にその名を見いだすことができ、確かに金沢から横浜に赴いたことが分かる。藤橋は何か理由があったのだろうか、養子となった弟（このとき一歳）宅に同居の身分であった。平岩は金沢の町絵師竹下昌平の三男で明治二年に平岩丈左衛門の養子となっている。この平岩の養父は碧海阿部甚十郎配下であったが、阿部は維新以後九谷焼改良に尽力した人物として知られ、第一回内国勧業博覧会や明治十一年パリ万博に出品、受賞歴がある。しかし、白山谷はこの記録に名前が見出せないばかりか、そもそも加賀藩士に同姓の者が全く見つからないのである。何らかの理由で変名を使ったのであろうか。

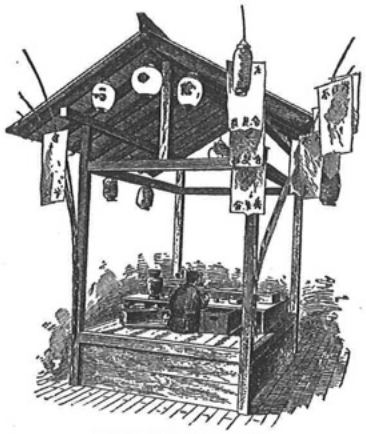
白山谷は石川出身の藤橋と拝郷、武と住所が「東京府芝区浜松町一丁目十五番地」と同じくなっているので、恐らくは出発前に集まった宿屋を住まいとしていたのだろう。拝郷は愛媛県出身で砥部焼の技術を身につけていたようで、後に製陶技術をかわれてルックウッドに雇われている。

フレッチャー雇のうちに高橋勝蔵の名がある。北海道立近代美術館の平利弘の調査によれば、高橋は亘理藩士の家に生まれ、十一人兄弟であったという。同藩は戊辰戦争後三万石が六十五石に減封され、明治四年（一八七一）藩主ともども家臣は北海道有珠郡西紋竈村（現伊達市）に移住を余儀なくされた。高橋はその後上京して絵画を学んだが、横浜でハンカチやショールの絵付けをしていたフレッチャーに雇われたようである。彼の族称はこうした履歴によるものだろう。また、高橋が後に「わが邦の工業の発達に必要なる美術を修得して以て国家に尽さん」（『亘里町史』下巻）と述べているのはこうした事情を言外に語っているのだろうか。フレッチャーは当初のもくろみが失敗したらしく、高橋はその後皿洗いやガラス拭きをして一八八七年にサンフランシスコのカリフォルニア・デザイン学校（the California School of Design）に入学し、二年間は在学の記録が残っている。その間、素描（一八八九年）と油彩（九〇年）で名誉賞を受け、ベンジャミン・アヴェリー金賞（一八九一年）を授与されており、高橋の言によれば「桑港画学校より、一等金賞の賞を受け、同時に同校幹事マアテン氏より同校の優等生なるの故を以つて仏国遊学を慫慂さる。マアテン氏は当時の日本桑港総領事珍田捨巳に交渉するも許可されず」終わった。九二年にはシカゴに移り、ヘンレイ・ゲイツについて舞台背景画を学んだ。そして、帰国する一八九五年にシカゴ万博に出品した《静物》は一等金賞を獲得した。高橋は夏に帰国（九五年八月二日に旅券返納）したようだが、黒田清輝、久米桂一郎が印象派を学んで帰国（七月）したのと同年同時期であり、どこま



5　シンシナティ産業博（図書館蔵、同図書館は1888年としているが、この屋台はニューヨークのものとひどく近似しており1885年と判断した。）

3　日本人村一行（A Veritable Japanese Village under the Sanction of the Imperial Japanese Government より）



NO. 17.–THE POTTERS.
For descriptive matter see page 12.

4　陶器職（3と同じ）

でも不遇を背負い続けたかのようである。

話がそれてしまったが、アメリカに渡ってからの日本人村は幾らか手懸りがある。興行主が作成したパンフレットのニューヨークとシンシナティでの二種類見つけることができた。いずれもタイトルは「日本帝国政府認可の真正日本人村」（A Veritable Japanese Village under the Sanction of the Imperial Japanese Government）とされ、副題が「土地の衣装を着た日本人男女と子供の街　彼らが日本の美術工芸（Art Industries）を毎日例示する」と書かれている。日本政府がこの興行に関わったことはないし、むしろ条約改正に向けて文化度を高く見せたい意思があって、外務省はこうした野卑な職人の出国に神経を尖らせていた（この経緯は前記倉田の著書に詳しい）。

ニューヨークでは、興行は十月四日から始まり、このパンフレットには写真から起こしたらしい凸版図版が数多く掲載され、この一行の実態がよく分かる。一行全員らしい図版〔図3〕には二十七名が見え、最前列の子ども二人も記録されている須藤の子と年齢が符合するようである。

いずれのパンフレットにも、この興行を「家庭劇　日本の生活」とドラマ仕立てに設定し、これに二十の登場人物として次のものが挙げられている。家具屋、絹織物（紡ぎ、織り、刺繍）、掛け物絵師、床屋、新粉細工、道具屋、弓、焼物（備州、太田、薩摩）〔図4〕、裁縫、七宝（金工、絵付け）、茶屋の女性、早描き絵師、青銅職、軸表装、木彫。彼等の仕事振りを紹介するために会場には屋台風なブースがしつらえられた。全体を通して見れば、ここでの演示が美術工芸の紹介に集中するのではなく（全体の半分強）、初めて日本文化に接する外国人にも分かり易い特徴的な風俗を取り上げている。

シンシナティでは、これより先九月十九日から開かれた第十三回シンシナティ産業博覧会〔図5〕のなかで日本人村が公開された。K・トラップの研究によれば、二十四の職種・イベント・エリアに分かれ、六十～七十名から成っていたという。シンシナティのパンフレットでも家庭劇登場人物は全く同じなので、幾らか出し物が付け加えられたのかもしれない。

ルックウッド製陶所は一八八三年九月W・W・テイラー（Taylor）を総支配人として招き、製品形状記録（Shape Record Book）がつくられ、製品の体系化、製品戦略の見直しを進めた。マリアが関心を抱き、制作した真葛焼風のグロテスクな日本工芸品の模倣から、ルックウッドはより優雅なシルエットと色彩を基調とする路線に転換し始める。この転換はむしろ日

7　アトリエにおける白山谷（1945年）

本人画工白山谷には好適なようだった。つまり、彼の描く繊細な線描やロマン主義的な主題の扱い方〔図6〕はまさにルックウッドが求めようとしていたものだったからである。これとは別に、マリアは依然としてルックウッドに工房をもち、制作を続けた。

白山谷は一八八七年五月三日にボストンからシンシナティに到着し、ルックウッド装飾スタッフに雇用された。ルックウッドが日本人画工を雇ったのはこのときが初めてではなかった。創設翌年の一八八一年八月十一日にイチヅカ・ケンゾを、八五年に拝郷益夫を雇ったことが記録されている。マリアは当初考えたことを実行に移そうとしテイラーもそれを支持していたのである。拝郷は日本人村巡業中に雇われたことになるが、白山谷は巡業後に呼び寄せられたらしい。なお、白山谷の名はアメリカではどういうわけか最初からKataro Shiroyamadaniと表記されている。白山谷は一八八七年から翌年にかけてマリアとともにシンシナティ美術アカデミーに学んでいる。イチヅカ、拝郷はルックウッドで長くは活動していないが、白山谷はこれ以後ながく第一線で活動し続け〔図7〕、一九四八年シンシナティで没するまでデコレーターとして生涯を全うした。

6　白山谷喜太郎《花瓶》1893年

8　マリア・ストーラー《台付カップ》1898年

一八八九年の清風與平の証言によれば、「同社（ルックウッド）の社長は一夫人にして非常の日本好なりしが先年日本に遊びし時余の店舗に来りて日本磁器の精緻なるに驚嘆し帰国の後之を試みしも遂に磁器を製すると能はず再び日本に来りて全国の陶磁器生産地を巡遊し遂に出雲焼の陶器を製造せんことを思ひ立ち二名の本邦職工を雇入れて帰国し前記ロックウード製陶会社を起こせしなり爾来毎三年に日本に来たり」と述べ、ニコルズが何度も来日したとしている。前記以外に一八八六年にもう一人の日本人名のサインが記録に残っているが、これがマリアの連れ帰ったという職工かどうかは不明である。

一八八六年G・ニコルズが死亡し、マリアは地元の弁護士B・ストーラーと再婚する。ストーラーは一八九〇年下院議員に選出され、ワシントンに住まうことになる。

一八八九年パリ万博でルックウッド製陶所は金賞を獲得し、ヨーロッパでその技量を知られるようになる。その後一八九四年に、マリアは金工品制作に意欲を持ち始め製陶所に金工部が設けられ、ここに白山谷が帰国の折に連れ帰った浅野与三吉が雇い入れられた。浅野は明治九年（一八七六）金沢で創設された銅器会社の職工の一人であり、かなり腕のいい金工職人であった。金工部は金属口金などを制作したが、販売不振のため一八九七年に廃止された。ストーラー夫妻はこの年外交官としてブラッセルに赴任することになり、夫人は浅野を同伴した。マリアは渡欧後（一八九九年にマドリッドに転任）も金工品制作を続け〔図8〕、一九〇〇年パリ万博では金メダルを獲得した。浅野はこの間ずっとマリアの助手を努めたが、一九〇二

一寸

第四十四号　二〇一〇年十一月

第四十四号目次

新・旧刊案内44
救荒植物と自筆本魯庵随筆（2）　青木　茂　1
鹿児島備忘録
―川辺正巳、谷口午二さんのこと―　岩切信一郎　7
十一番目の月が出た
―「日本近代の青春　創作版画の名品」展―　大谷　芳久　12
近代日本画の構図決定格子（一〇）
―江戸期：円山応挙（その一）―　金子　一夫　19
お魚とお肉とお酒のお話　丹尾　安典　24
『東京近傍写景法範』覚書き
銅・石版画遺聞39　森　登　26
ルックウッドの白山谷喜太郎
―たどりつけない実像　森　仁史　32
『新版画』のことなど　山田　俊幸　37
大谷芳久著『藤牧義夫 眞僞』刊行案内　40

新・旧刊案内44
救荒植物と自筆本魯庵随筆（2）

青木　茂

■日本中を狂気が支配していた時期の美術書を眺めてみたいと思い、日本敗戦の日に出版された図書は無いものかと、古本の奥付を探したり人にも聞いていたら、河野実さんが『週刊朝日』の昭和二十年八月十二日・十九日合併号のコピーを恵んでくれた。十九日発行で四十七巻二十二・三号、A4判、三十二ページ、定価六十銭で、表紙（第一ページ）は石井鶴三「婦女農耕図」木版画である。開巻すると八月四日付の「詔書」で「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ」と天皇制を護持されて、「他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス」でアジア数億の人間の戦禍と不幸に対する戦争責任も免れたと思っているらしい。僕が本誌先号に書いたような軍国少年になった結果は、残念無念であるが「国体を護持する」ためであったらしい。

『週刊朝日』が八月十八日や二十日付けの原稿を載せながら十九日発行というのは歴史的な時期なので不愉快ではあるが、日本に限らずジャーナリズムはそんなものであろう。緒方富雄の放送原稿「科学者になるといふこと（二）」の文末には「本篇は戦争終結前の記」とあって、中味はまごまごする論説に比べて、後に恥かしく思わなくとも良い内容をもっている。ところで救荒植物の実例や解説は言いつくされたのかこの号には「非常食のいろ〳〵　水戸学者、荘司県斎の試案」が載っている。飢えたことのない人の書くのは陳腐なもので、実験しての私案ではない、また変った食物でもない米ぬかやオオバコ、アケビの芽などは僕の子供のころの山村では常食であった。江戸も明治も遠くなっても日本の山村は都人士の非常食が常